北里大学高等教育開発センターニュース

Center for Development of Higher Education, Kitasato University NEWS

Vol.13

Contents

1 —— 巻頭言

2 —— 情報基盤センターより
学生メールのクラウド化について
—学生メールが「Gmail」に変わります—

3 —— 学生の学修時間をめぐる議論
—第9回公開講演会と中央教育審議会答申から—

4 —— FDのための必読書 —14／INFORMATION

巻　頭　言

学長就任挨拶と学士課程教育の更なる向上を目指して
—北里大学高等教育開発センターとともに歩む—

学長　岡安　勲

平成24年7月，第9代学長に就任しました。教学系の長として，また，大学創立50周年の節目を迎え，次なる50年，100年を見据えるにあたり，その責務を強く感じています。教職員の皆様におかれては，本学の教育向上に，是非ともご支援をお願いします。さて，現在，学士課程教育の「質」が問われています。これは逆に企業や社会の大学に対する高い期待があるものと感じます。グローバル化や少子高齢化，情報化など，急激な変化の中で，学生達には，生涯学び続け，どのような環境の中でも学生同士が切磋琢磨して，自己の人生を切り開く能力を身につける，そのための努力は惜しまないようにすることの重要性を説いていきます。学士課程教育では，高校までの受身の勉強とは質的に異なる主体的な学びのための学習の取り組みが大切です。学生個々が「受験向けの勉強と違い，ゴールが見えないような課題」などを見出し，その原因を探求して，最良策を導くために必要な専門的知識，汎用的能力を鍛え身につける，特に実習や体験活動を通して身につけることは，人生最大の「財産」になるものと考えるからです。本学はこれらのことを学生に付与するため様々な教育プログラムを計画し，教職員一同一丸となり推進することになります。その教育の要の一端を担っている高等教育開発センターには，是非，特に入学して間もない初年次生に“学生自らが主体的に学ぶ”とは何なのか，学びの基本を教授する方策を推進していただきたく希望します。

引き続いて，教学系に関する基本的な計画（一部）の概要を述べます。

目　標

本学は生命科学のパイオニアとして，生命科学領域における『オンリーワン』を目指し，『競争と連携』，『国際化』を推進するとともに，同窓生・PPAとの強い絆を目指しネットワークを充実して，社会との連携をますます深めていく。

計　画

1. 農医連携教育研究センターの設置及び農医連携による教育・研究の推進
   - ●これまでの成果を基礎として，学部・研究科・病院・研究所などの複数部門間のあらゆる連携の種の中から具体化できるテーマを抽出して推進し，その成果を教育・研究・診療などに還元する。
2. チーム医療教育の推進
   - ●チーム医療教育は，「高度なチーム医療を実践できる医療専門職」の育成である。「チーム医療の構成員としての専門性を生かし，積極的に医療に参画し，リーダーシップを発揮できる人材の育成」を目的とする。
3. 国際化の推進並びに国際部（事務局）の設置
   - ●多様な文化や言語に親しみ，世界のどこにおいても日本人としてのアイデンティティを保ち元気に働ける人材の育成，海外体験を通した国際性（国際感覚，グローバルな思考・態度，英語でコミュニケーションをとれる能力）の涵養，地球規模での問題の解決に進んで取り組める能力（リーダーシップ）の育成，世界各地から優れた留学生・研究者が集まり日常的に活動するキャンパスの創出等々を目的とする。先ずは，国際的に通用する教育システムの導入・整備，留学生の受入れ体制と本学学生の海外派遣を重点計画として取り組む。

以上，実現に向けて推進していく所存ですので，皆様のご協力をお願い申し上げます。

学生メールのクラウド化について
―学生メールが「Gmail」に変わります―

情報基盤センターでは学生サービスの一環として，学内に「学生用メールシステム」を構築し，学生メールアカウントの管理や問合せ対応を行なっています。この度平成25年4月（予定）より，Google社の提供するGoogle Apps（グーグルアップス）と呼ばれるクラウドサービス（※）に移行することになりましたので，ご報告します。

Google社の提供するクラウドメールサービスと言えば，よく知られている通り「Gmail（ジーメール）」ですが，実際に個人的に利用しているという方も多いのではないでしょうか。Google Appsに移行することによって，学生は，メールアドレスは現状のままで，各自の大学用メールとしてGmailが使えるようになります。**教職員メールについては今回の移行の対象外となります。**

Gmailを利用することの利点は，1人あたりが保存できるメールの総容量が25GBと大容量になることです。これまでの学生1人あたりが使用できる容量は50MBでしたので，一気に500倍に増加することになります。なぜこのような増量が可能なのか。それがクラウドサービスを利用することの利点の1つです。

これまでの学生メールシステムは，学内にメールサーバを設置して運用していました。これはオンプレミス型と呼ばれています。学内に設置している以上，設置場所の広さや予算といった観点から，容量の増設には場所的，費用的な制限があります。ところが，クラウドサービスに移行することによって，今回の場合はGoogleですが，サーバの管理や容量の増設はGoogleが行なってくれます。使用する容量によって価格が異なることが一般的ですが，古くなった機器の交換や容量の増設などの設備投資に対して利用者が費用を負担することはほとんどありません。

さらに，同様の理由から卒業生についても在学中と同じように学生メールを利用することができるようになります。卒業生が利用し続けた場合，年々利用者数が増加し続けることになり，それだけ沢山の容量が必要になりますが，先に述べた通り，容量の増設についてわれわれが心配する必要がないからです。このことによって，卒業後も大学からの連絡や，卒業生間で同窓会の連絡に使用するなど，活発に利用されることを期待しています。

ここまではGmailに移行することによる良い点ばかりを挙げてきましたが，反対に懸念される事は何でしょうか。それは費用と，メールを学外で管理することに伴うセキュリティリスクです。次はこれらについてお話したいと思います。

先に，メール容量が1人あたり25GBと大容量になること，そしてクラウドサービスは使用する容量によって価格が異なると書きました。さらに，卒業後もずっと使えるため，ユーザ数はどんどん増加していきます。これで一体，年間どれくらいの費用になるのか心配になるところですが，実はGoogle Appsは教育機関であれば無料で利用することができます。従って，運用に掛かるコストは運用のサポートを依頼する会社への保守料のみとなり，現行のメールサーバに比べても大幅なコスト削減が実現できます。

次にセキュリティについてですが，メールの送受信は全てHTTPSと呼ばれる暗号化された通信方式によって行われるため，通信経路の途中で第三者に傍受される心配はありません。さらに，クラウドサービスは物理的なサーバを複数拠点に分散して設置しているため，災害等によってメールのデータが消失することも防がれています。

また，現在Gmailは世界中の個人や法人のユーザに利用されており，システムの性能を表す3つの指標である可用性，信頼性，サービス性に優れています。われわれが学生メールとしてGmailを選択した理由がそこにあります。

最後に，他大学におけるクラウドメールサービスの利用状況についてですが，2012年5月時点の情報で，岡山大学，法政大学，立教大学など国公立，私立大学を問わず，60を越える大学がGmailを利用していることがわかっています。Google以外にも，大手ではMicrosoft，Yahoo!がクラウドメールサービスを実施しており，それらを利用している大学もありますが，いずれにせよ学生メールとして自前でサーバを管理するのではなく，クラウドサービスを利用する，という大学が増えてきていると言えます。

以上述べてきた通り，学生メールをGmailへ移行することで，運用面と利便性が共に向上することが期待できます。これからも，学生とのコミュニケーションツールとして，学生メールをより一層ご活用ください。

※クラウドサービスとは，サービスがインターネットを通じて提供され，利用者がそれらのサービスを運用しているサーバなどの所在を意識することなく利用できる形態のサービスの総称です。通常複数のサーバが連携されて運用されており，利用者から見た時にとらえどころのない雲（cloud）のようであることから，このように呼ばれています。

学生の学修時間をめぐる議論
―第9回公開講演会と中央教育審議会答申から―

高等教育開発センター　小島　佐恵子

本センターは，2012年12月12日（水）に大学評価・学位授与機構の森利枝先生をお迎えし，第9回公開講演会「単位制度をめぐる背景と課題」を開催した。単位制度はアメリカの中等教育機関で，大学進学にあたって一定の学習量の基準を示す指標として導入されたものであり，「学習にかかった時間」を基に考えられたものである。この単位制度に則って教育をしている大学では，その実質化，つまり「学修時間の確保」が目下課題となっており，それについて議論するために今回の講演会も開催した。

2008年に出された文部科学省中央教育審議会答申『学士課程教育の構築に向けて』(以下，学士課程答申）に続き，2012年8月28日に出された答申『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け，主体的に考える力を育成する大学へ～』(以下，答申）においても焦点化されているのは，「学生の学修時間」である。2012年の答申の中では，大学教育の質的転換の好循環の「始点」として「学生の学修時間の増加・確保」を挙げている。これは我が国の大学生の学修時間がアメリカと比較して著しく少ないというのが事の発端であり，大学設置基準上は1日8時間の学修を想定しているものの，実際には4.6時間とその半分程度の学修時間しか確保されていないという東京大学の調査結果が示されている。質の転換のためには，まずは量の確保，という論理である。先の講演会では，単位制度の歴史的経緯に加え，発祥地であるアメリカでも学修時間の不足に頭を悩ませていること，また，その解決策として，ある大学では課業時間に学習目標の達成状況を併せたモジュール制が導入されていることなどが紹介された。他方，日本の問題としては，学修時間の確保は，大学教員の教育担当コマ数の多さや入試に割かれる時間，さらには学生が在学中に就職活動を行わなければならないことを考慮すると，構造的に無理があることが指摘された。

さて，そのうえでどうするか，ということである。先述の答申の中では，学修時間に着目する理由が3つ挙げられている。1つは，単位制度を基準にしているのだから，やはりそれに沿った学修が行われていることで学位が授与されるべきだということである。その際，①量だけでなく「質」を伴った学修時間が確保されているか，②①が各大学が重視する教育活動として適切な設定になっているか，③組織的にその確保に対応しているか，という点で学士課程教育の目標が達成できているかどうかが示されるという。

この3点について本学の例を含めながら解釈すると，①は『学士課程答申』で示された「学士力」や，いわゆる現代社会で必要な能力（今回の答申の表題にもある，生涯にわたって学び続ける力，主体的に考える力等）を身につけるため，学生からみて受動的な教育の場（知識の伝達・注入を中心とした教員が一方的に話す講義等）ではなく，「学生が主体的に問題を発見し解を見出していく能動的学修（アクティブ・ラーニング)」が確保されているかということになる。一般的に医療系ではこのような取組がさかんであると言われるが，まさに本学でもチーム医療教育プログラムや農医連携教育プログラム，早期体験学習(Early Exposure)，各種実習・演習，病院実習等々，これら以外にも多くの取組があり，最近ではクリッカー（Audience Response System）やeラーニングシステム（Moodleなど）も活用されてきていることから，さらなる取組がなされつつあると言える。もちろんITを活用しなくとも，学生が講義で得た知識を使って表現したり，それを実際に活用したりする機会を設けているかどうかが，ここではポイントとなる。

②は，答申に示されている「教育課程の体系化」(学位授与方針との首尾一貫性，科目間の連携や関連性の明示等）との関連が強い。資格取得を目指す学部や，積み上げ式カリキュラムが伝統的に実施されている理系学部においては，すでに自明のものとなっているところが多いと言える。

③は，答申で示されているところの「組織的な教育の実施」「授業計画（シラバス）の充実」「全学的な教学マネジメントの確立」が該当すると考えられる。先の教育課程の体系化に基づいて，個々の授業科目が個々の教員の責任だけに閉じられていないか，教員間の連携と協力による組織的な取組となっているかどうか。シラバスも学生が主体的に学修することができるような内容が示されているかどうか，授業の「工程表」になっているかどうかがポイントとなる。また，このような教学の運営を学長のリーダーシップの下で実施できるよう整備することや，改革のサイクルを展開することが重要だとされている。これについては，本学でも目下実施・検討されている。

すなわち，答申では，大学が学生の学習成果や能力を伸ばすべく，属人的な教育から組織的な教育の展開へと進化することが強調されている。その始点としての「質」を伴った「学修時間の増加・確保」なのである。単位制度の構造的な問題が自明となった今，本来その部分に議論の余地があるが，ひとまずそれは日本全体（もっと広く？）で公論を育むこととして，一教員としてできることとしては，「質」への着目，つまり学生が得た知識を使って表現したり，応用したりできるような機会をいかに増やすかということを他の教員と議論しながら考えてみたいと思っている。

ＦＤのための必読書 ── 14

平田オリザ 著

『わかりあえないことから－コミュニケーション能力とは何か』

講談社現代新書
740円（税別）

若者のコミュニケーション能力が低下したという声が聞かれる一方で，企業は新卒採用時にコミュニケーション能力を最も重視する傾向にあるという。今回紹介するのは，昨今のコミュニケーション能力をめぐる状況に，違和感，疑問を感じた著者が「コミュニケーション能力とは何か」という本質に迫るコミュニケーション論を語った一冊である。

「わかりあえないことから」というタイトルが目を引く。そもそも人間はわかりあえないから，共有できる部分を探して広げていく，まずは「わかりあえないことから」始めようという視座からのコミュニケーション論である。日本のコミュニケーション文化を「わかりあう文化」，「察しあう文化」と称し，国際社会を生き抜いていかねばならない子どもや若者に対しては，「察しあう・わかりあう文化に対する誇りを失わせないままで，少しずつでも，他者に対して言葉で説明する能力を身につけさせてあげたいと思う」と著者は言う。そこに必要なのは「対話」であり，「対話」とは，異なる文化や価値観をもつ他者との相互理解であるとの見方から，「コンテクスト」を理解する能力が必要で，その能力は本来誰もが持っているが，それがうまく発揮できるかは環境によって左右されるとし，「コミュニケーションをデザインする，コミュニケーションの環境をデザインする」との既存の枠組みとは違った新たなコミュニケーション論を展開している。

劇作家で，大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授でもあり，長年コミュニケーション教育に携わり，演劇による実践的教育を積み重ねてきた著者の語り口は，平易でありながらも説得力がある。事例として取り上げられた経験談にも思わず「なるほど」と頷いてしまう。コミュニケーション教育を考える上で，お薦めの一冊である。

INFORMATION

第９回高等教育開発センター講演会

昨年12月12日（水）午後6時から7時半まで，相模原校舎L2号館にて，第9回講演会が行われました。講師には，大学評価・学位授与機構研究開発部准教授の森利枝氏をお迎えし，「単位制度をめぐる背景と課題」というテーマでご講演いただきました。講演は，テレビ会議システムで他のキャンパスへも同時中継されました。「単位制度の実質化」が課題とされる中，大学関係者にとって非常に関心の高いテーマであり，師走の遅い時刻からの開催でしたが，学外を含め多くの方に参加いただきました。

◆ 各学部のFD活動

・平成24年度（第16回）医療衛生学部教員教育研修会

平成24年10月27日　A3号館

メインテーマ　世界で活躍できる学生の育成

サブテーマ　①TJUを通した学生の国際的意識
②メンタルヘルス対応に関する研修
③現代学生気質
④模擬講義

・平成24年度第1回北里大学獣医学部教員研修会（講演会）

平成24年11月7日　V1号館

講　演　「認定動物看護師制度の発足と今後」について
～チーム動物医療の発展に向けて～

日本獣医師会理事　細井戸　大成

・平成24年度第1回FD研修会（海洋生命科学部）

平成24年11月12日　MB号館

授業改善事例紹介－教員の授業改善に向けた取組－

編　集　後　記

本号では，昨年7月学長に就任されました岡安勲先生から巻頭言をいただき，当センターの取り組むべき課題にも触れてくださいました。昨年末に開催した第9回講演会の詳細は叢書にてお届けする予定ですが，本誌で小島センター員が，講演会を踏まえた内容で「学生の学修時間をめぐる議論」をまとめておりますので，ご一読ください。

（赤澤）

北里大学高等教育開発センターニュース
Center for Development of Higher Education, Kitasato University NEWS
Vol.13
発行日　2013年2月15日
発　行　北里大学高等教育開発センター
〒252-0373 神奈川県相模原市南区北里1-15-1
FAX：042-778-9463
発行責任者　鈴木　牧彦
表紙絵：古矢　鉄矢
北里大学高等教育開発センターWebサイト
http://www.kitasato-u.ac.jp/cdhe/